

銀河鉄道の夜

宮沢賢治

第一章 午後の授業

「ではみなさんは、そういうふう川だと言われたり、乳の流れたあとだと
言われたりしていた、このぼんやりと白いものがほんとうは何かご承知です
か」先生は、黒板につるした大きな黒い星座の図の、上から下へ白くけぶつた
銀河帯のようなところを指しながら、みんなに問いかけました。

カムパネルラが手をあげました。それから四、五人手をあげました。ジョバ
ンニも手をあげようとして、急いでそのままやめました。たしかにあれがみん
な星だと、いつか雑誌で読んだのですが、このごろはジョバンニはまるで毎
日教室でもねむく、本を読むひまも読む本もないので、なんだかどんなことも

第一章 午後の授業

よくわからないという気持ちです。

ところが先生は早くもそれを見つけたのです。

「ジョバンニさん。あなたはわかつているのですよ」

ジョバンニは勢いよく立ちあがりましたが、立つてみるともうはつきりとそれを答えることができないのでした。ザネリが前の席からふりかえって、ジョバンニを見てくすつとわらいました。ジョバンニはもうどぎまぎしてまっ赤になつてしまいました。先生がまた言いました。

「大きな望遠鏡で銀河をよく調べると銀河はだいたい何でしょう」

やつぱり星だとジョバンニは思いましたが、こんどもすぐに答えることができませんでした。

先生はしばらく困ったようでしたが、眼をカムパネルラの方へ向けて、「ではカムパネルラさん」と名指しました。

するとあんなに元気に手をあげたカムパネルラが、やはり同じもじ立ち上がつたままやはり答えができませんでした。

先生は意外なようにしばらくじつとカムパネルラを見ていましたが、急

いで、

「では、よし」と言いながら、自分で星図を指しました。

「このぼんやりと白い銀河を大きな望遠鏡で見ますと、もうたくさんの小さな星に見えるのです。ジョバンニさんそうでしょう」

ジョバンニはまっ赤になつてうなずきました。けれどもいつかジョバンニの眼のなかには涙がいつぱいになりました。そうだ僕は知っていたのだ、もちろんカムパネルラも知っている、それはいつかカムパネルラのお父さんの博士のうちでカムパネルラといつしよに読んだ雑誌のなかにあったのだ。それどころなくカムパネルラは、その雑誌を読むと、すぐお父さんの書齋から巨きな本もつてきて、ぎんがというところをひろげ、まっ黒な真いつぱいに白に点々のある美しい写真を二人でいつまでも見たのでした。それをカムパネルラが忘れるはずもなかったのに、すぐに返事をしなかったのは、このごろぼくが、朝にも午後にも仕事がつらく、学校に出てもうみんなともはきはき遊ばず、カムパネルラともあんまり物を言わないようになったので、カムパネルラがそれを知つてぎのどくがつてわざと返事をしなかったのだ、そう考えるとたまらない

第一章 午後の授業

ほど、じぶんもカムパネルラもあわれなような気がするのです。

先生はまた言いました。

「ですからもしもこの天の川がほんとうに川だと考えるなら、その一つ一つの小さな星はみんなその川のその砂や砂利の粒にもあたるわけです。またこれを巨きな乳の流れと考えるなら、もつと天の川とよく似ています。つまりその星はみな、乳のなかにまるで細かにうかんでいる脂油の球にもあたるのです。そんなら何がその川の水にあたるかと言いますと、それは真空という光がある速さで伝えるもので、太陽や地球もやつぱりそのなかに浮かんでいるのです。つまりは私も天の川の水のなかに棲んでいるわけです。そしてその天の川の水のなから四方を見ると、ちょうど水が深いほど青く見えるように、天の川の底の深く遠いところほど星がたくさん集まって見え、したがって白くぼんやり見えるのです。この模型をごらん下さい」

先生は中にたくさん光る砂のつぶのはいった大きな両面の凸レンズを指しました。

「天の川の形はちょうどこんななのです。このいちいちの光るつぶがみんな

私^{わたし}どもの太陽^{たいよう}と同じようにじぶんで光^ひっている星^ただと考え^{かんが}えます。私^{わたし}どもの太陽^{たいよう}が^{よう}このほぼ中^{ちゅう}ごろにあつて地球^{ちきゅう}がそのすぐ近くにあるとします。みなさんは夜^よにこのまん中に立つてこのレンズの中を見^みまわすとしてごらんなさい。こっちの方はレンズが薄^{うす}いのでわずかの光^ひる粒^{つぶ}すなわち星^{ほし}しか見^みえないでしょう。こっちやこっちの方はガラスが厚^{あつ}いので、光^ひる粒^{つぶ}すなわち星^{ほし}がたくさん見^みえその遠^{とほ}いのはぼうつと白^{しろ}く見えるという、これがつまり今日^{けふ}の銀河^{ぎんが}の説^{せつ}なのです。そんならこのレンズの大きさがどれくらいあるか、またその中のさまざまの星^{ほし}についてはもう時間^{じかん}ですから、この次^{つぎ}の理科^{りか}の時間^{じかん}にお話^わします。では今日^{けふ}はその銀河^{ぎんが}のお祭^{まつ}りなのですから、みなさんは外^{そと}へでてよくそらをごらんなさい。ではここまでです。本^{ほん}やノートをおしまいなさい」

そして教室^{きょうしつ}じゅうはしばらく机^{つくえ}の蓋^{ふた}をあけたりしめたり本^{ほん}を重^{かさ}ねたりする音がいつぱいでしたが、まもなくみんなはきちんと立つて礼^{れい}をすると教室^{きょうしつ}を出^でました。

ginga-1 (2017-05-06 12:04)

第二章 活版所^{かつばんじょ}

ジョバンニが学校の門を出るとき、同じ組の七、八人は家へ帰らずカムパネ
ルをまん中^{こうちゅう}にして校庭^{こうてい}の隅^{すみ}の桜^{さくら}の木^きのところに集^{あつ}まっています。それはこ
んやの星祭^{ほしまつ}りに青いあかりをこしらえて川^{かわ}へ流^{なが}す烏瓜^{からすうり}を取り^とに行く相談^{そうだん}らし
かったのです。

けれどもジョバンニは手を大きく振^ふってどしどし学校の門^{もん}を出て来^きました。
すると町の家々ではこんやの銀河^{ぎんが}の祭^{まつ}りにいちいの葉^はの玉^{たま}をつるしたり、ひの
きの枝^{えだ}にあかりをつけたり、いろいろしたくをしているのでした。

家へは帰らずジョバンニが町を三^{さん}つ曲^まがつてある大きな活版所^{かつばんじょ}にはいつて靴^{くつ}

第二章 活版所

をぬいで上がりますと、突き当たりの大きな扉をあけました。中にはまだ昼なのに電燈がついて、たくさんの輪転機がばたりとまわり、きれで頭をしばったりラムプシェードをかけたたりした人たちが、何か歌うように読んだり数えたりしながらたくさん働いておりました。

ジョバンニはすぐ入口から三番目の高い卓子にすわった人の所へ行っておじぎをしました。その人はしばらく棚をさがしてから、

「これだけ拾って行けるかね」と言いながら、一枚の紙切れを渡しました。ジョバンニはその人の卓子の足もとから一つの小さな平たい函をとりだして向こうの電燈のたくさんついた、たてかけてある壁の隅の所へしゃがみ込むと、小さなピンセットでまるで粟粒ぐらいの活字を次から次へと拾いはじめました。青い胸あてをした人がジョバンニのうしろを通りながら、

「よう、虫めがね君、お早う」と言いますと、近くの間、五人の人たちが声もたてずこつちも向かずに冷たくわらいました。

ジョバンニは何べんも眼をぬぐいながら活字をだんだんひろいました。

六時がうつてしばらくたつたころ、ジョバンニは拾った活字をいっぱいに入

れた平たい箱はこをもういちど手にもった紙しきれと引き合わせてから、さつきの卓子テアールの人へ持つて来ました。その人は黙だまってそれを受け取うつてかすかにうなずきました。

ジョバンニはおじぎをすると扉とびらをあけて計算台のところに来ました。すると白服しろふくを着た人がやつぱりだまって小さな銀貨ぎんかを一つジョバンニに渡わたしました。ジョバンニはにわかに顔いろがよくなつて威勢いせいよくおじぎをすると、台の下に置いた鞆かばんをもつておもてへ飛びだしました。それから元氣よく口笛くちふえを吹きながらパン屋やへ寄つてパンの塊かたまりを一つと角砂糖かくざととうを一袋ふくろ買いますといちもくさんに走りだしました。

ginga-1 (2017-05-06 12:04)

第三章 家

ジョバンニが勢いよく帰って来たのは、ある裏町の小さな家でした。その三つならんだ入口のいちばん左側には空箱に紫いろのケールやアスパラガスが植えてあつて小さな二つの窓には日覆いがおりましたままになっていました。

「お母さん、いま帰ったよ。ぐあい悪くなかったの」ジョバンニは靴をぬぎながら言いました。

「ああ、ジョバンニ、お仕事がひどかったろう。今日は涼しくてね。わたしはずうとぐあいがいいよ」

ジョバンニは玄関を上がつて行きますとジョバンニのお母さんがすぐ入口の

第三章 家

室^{へや}に白い巾^{きん}をかぶって寝^{やす}んでいたのでした。ジョバンニは窓^{まど}をあけました。

「お母さん、今日は角砂糖^{かくざとう}を買^かってきたよ。牛乳^{ぎゅうにゅう}に入れてあげようと思^{おも}って」

「ああ、お前^{まえ}さきにおあがり。あたしはまだほしくないんだから」

「お母さん。姉^{ねえ}さんはいつ帰^{かえ}ったの」

「ああ、三時^{さんじ}ころ帰^{かえ}ったよ。みんなそこらをしてくれてね」

「お母さんの牛乳^{ぎゅうにゅう}は来ていないんだろうか」

「来^きなかつたろうかねえ」

「ぼく行^いつてとつて来^きよう」

「ああ、あたしはゆつくりでいいんだからお前^{まえ}さきにおあがり、姉^{ねえ}さんがね、トマトで何かこしらえてそこへ置^おいて行^いったよ」

「ではぼくたべよう」

ジョバンニは窓^{まど}のところからトマトの皿^{さら}をとつてパンといつしよにしばらくむしゃむしゃたべました。

「ねえお母さん。ぼくお父さんはきつとまもなく帰^{かえ}ってくると思うよ」

「ああ、あたしもそう思う。けれどもおまえはどうしてそう思うの」

「だって今朝の新聞に今年は北の方の漁はたいへんよかったと書いてあったよ」

「ああだけどねえ、お父さんは漁へ出ていないかもしれない」

「きつと出ているよ。お父さんが監獄へはいるようなそんな悪いことをしたはずがないんだ。この前お父さんが持つてきて学校へ寄贈した巨きな蟹の甲らだのとなかいの角だの今だってみんな標本室にあるんだ。六年生なんか授業のとき先生がかわるがわる教室へ持つて行くよ」

「お父さんはこの次はおまえにラッコの上着をもつてくるといったねえ」

「みんながぼくにあうとそれを言うよ。ひやかすように言うんだ」

「おまえに悪口を言うの」

「うん、けれどもカムパネルラなんか決して言わない。カムパネルラはみんながそんなことを言うときはきのどくそうにしているよ」

「カムパネルラのお父さんとうちのお父さんとは、ちょうどおまえたちのように小さいときからのお友達だったそうだよ」

第三章 家

「ああだからお父さんはぼくをつれてカムパネルラのうちへもつれて行ったよ。あのころはよかったなあ。ぼくは学校から帰る途中たびたびカムパネルラのうちに寄った。カムパネルラのうちにはアルコールランプで走る汽車があつたんだ。レールを七つ組み合わせるとまるくなつてそれに電柱や信号標もついていて信号標のあかりは汽車が通るときだけ青くなるようになっていたんだ。いつかアルコールがなくなつたとき石油をつかつたら、缶がすっかりすけたよ」

「そうかねえ」

「いまでも毎朝新聞をまわしに行くよ。けれどもいつでも家じゅうまだしいんとしているからな」

「早いかねえ」

「ザウエルという犬がいるよ。しつぽがまるで箒のようだ。ぼくが行くと鼻を鳴らしてついてくるよ。ずうつと町の角までついてくる。もつとついてくることもあるよ。今夜はみんなで烏瓜のあかりを川へながしに行くんだって。きつと犬もついて行くよ」

「そうだ。今晚は銀河のお祭りだねえ」

「うん。ぼく牛乳をとりながら見てくるよ」

「ああ行つておいで。川へははいらないでね」

「ああぼく岸から見ただけなんだ。一時間で行つてくるよ」

「もつと遊んでおいで。カムパネルラさんといつしよなら心配はないから」

「ああぎつといつしよだよ。お母さん、窓をしめておこうか」

「ああ、どうか。もう涼しいからね」

ジョバンニは立つて窓をしめ、お皿やパンの袋をかたづけると勢いよく靴を
はいて、

「では一時間半で帰ってくるよ」と言いながら暗い戸口を出ました。